

「〇〇し合う」人や動きを紹介する地域福祉マガジン

グッチョ

G u c c h o

VOL.39



TOPIC

届けたいのは
くぐれない日常 ²

-another contents-

【シリーズ 叶え合う支援】

企業×地域福祉の可能性 6



新一さんはコーヒーが大好物。「定期的に行く眼科の終わりにコンビニのコーヒーが習慣なんですけど、昨日の診察の後には行かなかったんです。それを今日もぼやいてるんですよ」と苦笑いする二人



(上) 美弥子さんの誕生日を祝って新一さんが書いた絵。小学校高学年の頃の作品。「昔から可愛くなって思っていました」と美弥子さん (下) 特殊なマジックで陶器に直接文字を書き、トースターで加熱定着させた作品。商品として販売しています



届けたいのは くくれない日常

【絵と文字作家・古賀新一さん】

Instagramで特徴的な文字や数字、記号が並んだアート作品に出会いました。「shinichi koga」というアカウントでプロフィールには「絵と文字作家」、「自閉症兄の日常」と書かれています。投稿は古賀新一さんの作品の紹介の他、障害の事や過去の出来事、家族の気持ち、日々の一コマまで「まぜこぜ」。運営する妹の馬場美弥子さんと母・古賀禮子さんの思いを聞きました。

始めは「障害×アート」

「自閉症の兄の作品を紹介していこうと思って始めたんです」。昔から兄の絵や日記の文字が好きだった美弥子さん。少し前、岩手からアート作品を発信している兄弟を知り、障害があっても自立できている姿に衝撃を受けます。「いつか兄の作品も商品化になければ」という思いで始めたそうです。

そんな中、投稿を考えるきっかけが訪れます。それは知人の言葉でした。「今日の赤ちゃんを楽しみに見ているよ」という一言にハッとして。日常風景の投稿に何かを感じている人がいるんだと気づきました。

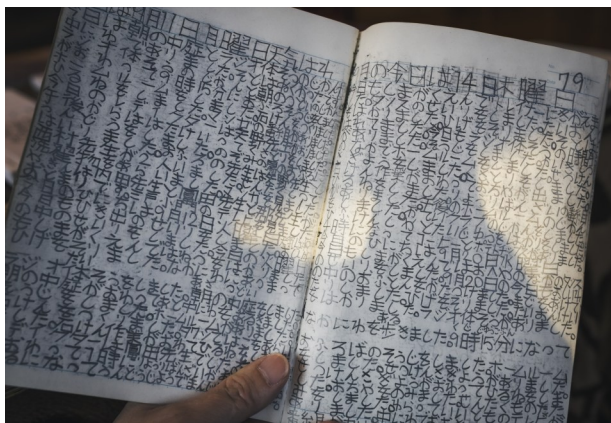
「昔は、障害者への差別や偏見が今より強くて」と切り出すのは禮子さん。「美弥子が小学4年の時、市民会館で開かれた作文発表会に出てね。タイトルは『私の大事なお兄ちゃん』。新ちゃんの自閉症の事はつきりと発表したの。周りの子たちからいじめられないか心配で。幸い友達はお兄ちゃんも一緒に遊ぼう」と言ってくれたそう。美弥子さんは「兄の事を隠さず話す母の姿をずっと見ていました。でも、兄がからかわれることはあったし、世の中にはそうできる人ばかりじゃない。何も悪くないのに『すみません、うちの子を受け入れてください』と言わないといけない現実も見てきました。そんな行き場のない気持ちが昔から根底にあって。だから、私たちが経験して感じたことは共有したいなと思いました」。

当初は「障害者アート」的な打ち出しを意識していた美弥子さん。「知り合いに『障害者という言葉は必要?』と言われ、本当にそうだなと思いました。投稿を見てもらうのに、障害とかアートとか、そんなカテゴリーは関係ないな。例えば老いと障害との違いは先天的か後天的かくらいで、どちらも暮らしの中で起こること。そういった垣根は越えたいんです。だから作品も暮らしも、思いも『まぜこぜ』でいいなって」。

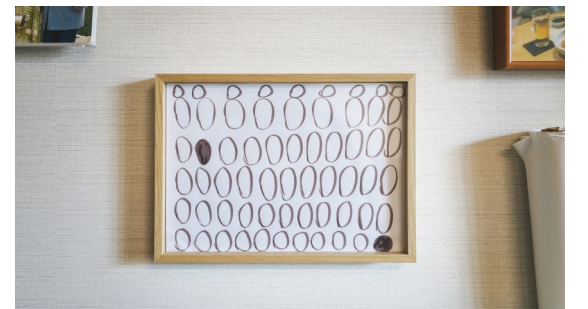
特徴と考える時はきつと来る

取材の2日後、新一さんが通う就労支援事業所を訪れました。午前中は仕事、午後はいろんな活動が行われています。この日は音楽。スタッフから「新一さんのクーピー演奏が始まるよ」と言われ、何のことか分からず見ていると、新一さんの手元に届いたのは長い細い紙箱。中には使い切った丸くなったクーピーペンシルがたくさん入っています。演奏が始まるとリズムに合わせてジャラジャラとかき混ぜ、曲にアクセントを加えます。

「兄は幼少期から個性的な絵や文字を書いていて、それがアート作品になったのは10年前。前に通っていた事業所が可能性を見い出してくれました。私たちが兄の障害を『特徴』と思えるようになった大きなきっかけです」と美弥子さんは振り返ります。



新一さんの昔の日記。「自閉症という障害の特徴を感じてもらうことも大切。障害者が身内に居ないとどう付き合えばいいかわからないと思うから」と美弥子さんは話します

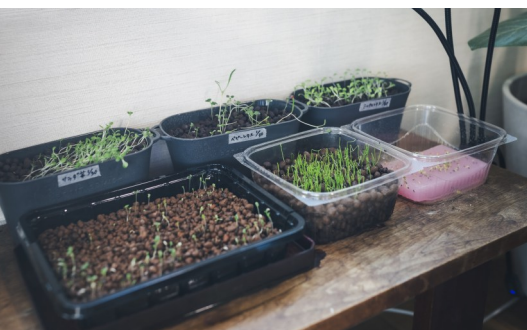


(左) 2月中旬、初めて取材に行くとき新一さんはピアノのレッスン中でした。53歳の新一さんがピアノを始めたのは約3年前。「私も一緒に習っているけど、いつでも成長できるんだと感じますよ」と禮子さん (上) 「コーヒー豆」。作品は自宅各所に

人はいろんな可能性を持っているー

ようやくそう思えるようになった。先が見えないような気持ちになることもあった。閉じ込めてしまいたくなることもあった
もちろん優しい一面もたくさん知っている

楽しんだり、泣いたり、笑ったり、わめいたりしながら、私たちは暮らしてきました。ようやく今、穏やかに暮らしています
そんな日常が誰かの何かの救いになれば
(左から禮子さん、新一さん、美弥子さん)



届けたいのは くくれない日常 終わり



(上) 事業所での音楽活動の風景 (下) 通っている事業所が就労継続支援B型であるため、新一さんがそれを文字に。事業所の壁に貼られています



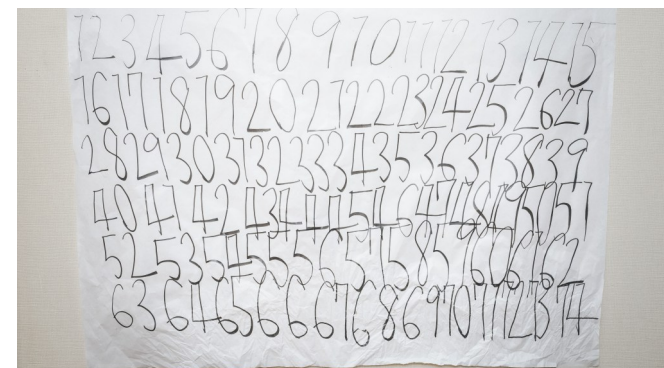
新一さん専用のオリジナル楽器「クーピー」。指の力が強い新一さんは弦楽器などは指を怪我するので事業所のスタッフが考案したそう

「新ちゃんとは本当にいろんな苦勞を乗り越えてきました」と禮子さん。「1、2歳のころから新聞の経済欄を眺め、国旗なんか一度見たら覚える。我が家に天才が生まれたかと思いました。その矢先、3歳で自閉症と判明。続けざまに腎盂炎になって死の間際までいきました。中学ではひどいいじめに遭い、30代で入所した施設では治療で薬漬けに。生死をさまよいました」。いろんな出来事やその時々、の感情を家族で乗り越え、ようやく新一さんとアートが会います。「こんなに楽しい活動につながった。今不安な人に今の兄を見てもらって、未来はつらいことばかりじゃないと感じてほしい。だからこそ私たちが向き合った現実も届けないと。楽ではなかったけど、乗り越えてみると意外と大丈夫だった。り、良いこともあったりして。言語化は難しいけど、そんな雰囲気、兄と私たちの日常から感じてもらえると嬉しく思います」。

なぜこぜの投稿には「くくれない」という思いと「くくれない」という現実が共存しています。それが日常なのだと言うように。

・・・

事業所から帰宅し、大好きなコーヒーを二気に飲み干した新一さんに質問しました。「絵や文字を書いている時はどんな気持ちですか。楽しいですか、苦しいですか」。新一さんは私から目をそらしながら「楽しい、うれしい。楽しい、うれしい」。(担当・フトシ)



(上) 新一さんの代表的な作品は文字。表紙写真の背景は花の包み紙に数字を羅列した作品です(右) 新一さんが最近始めた水耕栽培。サラダ菜やベビーレタスに毎朝水をやっています





企業×地域福祉の可能性 地域の困りごとへの新たな関わり方

記事：月田 尚子

体調が芳しくない母親を気遣い、誕生日ケーキをプレゼントしてあげたい田中桜菜さん。彼女の願いを叶えるために、久留米ガス株式会社（以下久留米ガス）は企業の立場で協力しました。企業が地域福祉に参加することはどういう意味があるのでしょうか。総務部の廣木孝行さんと権藤丞さんにお話を伺いました。

企業はもつと地域のことを知るべき
久留米ガスは、「ガスを通じて安全で快適な暮らしを提供していきます。」という企業理念の下、さまざまな地域貢献事業を実施しています。久留米市が企業と市民活動が協働することを推進し始めたこと、久留米市と久留米ガスが包括連携協定を結び、その中に「地域の困りごとを解決する」という項目があったこと、などが重なり、地域貢献の方法が、寄付や市の行事参加から地域の方々と共に活動する方向に動いていました。そんな中、AU-formal実行委員会（以下AU）から相談が舞い込みます。新しい福祉の形「叶え合う支援」を一緒に実現しませんか、と提示されたメニューの一つに「お母さんの誕生日ケーキを作る」という項目がありました。

「これなら受けることができそうだと思います」と権藤さんは振り返ります。久留米ガスにはキッチンスタジオがあり、料理教室を開催しています。権藤さんは早速「地域のお困りごとの解決をやりましょう」と社内に打診。「これから私たちは少子高齢化などいろいろな課題と向き合わなければならぬ。企業が地域を知ることとはとても重要

だと思います」と廣木さんも語ります。

ケーキ作りの講師は社員が担当することになりましたが、講師をするのは彼らにとって初めてのこと。業務上、中高生世代との接点はほぼなかったため、田中さんが楽しめる雰囲気をつくれるか不安がありました。そこで、権藤さんは、田中さんにとってお兄さん、お姉さん世代になる若い社員に声をかけました。「予行練習で作ったケーキは焦げてしまいました（笑）。難しさもありましたが、楽しみながらできました」と話す権藤さん。当日参加したのは田中さんを含む3人の女の子。最初は緊張した面持ちでしたが、だんだんと笑顔が増えてきました。教室終了後、田中さんから「出来上がったケーキを持ち帰ったらお母さんがとても喜んでくれた」とAUに報告があったそうです。担当した久留米ガスの社員たちは、地域貢献活動に初めて参加する人が多く「こんなやり方もあるのか」と驚いていたそう。このことをきっかけに、子ども向けのイベントにブース出展をし、子どもたちに関わることも増えてきたそうです。

課題を抱えていて、大変なことをしたいと解決できないイメージがあります。」と権藤さんは話します。「だから第一ステップとして、こういう形で社員が関わったことはとてもいい方法だと思います。このような活動に社員を誘うときは、目的や背景を先に説明するのではなく、相手の興味に合わせて声を掛けていきます。『こういう人がいて』と説明すると、その時は参加してくれるかもしれないけれど続かない。だからこそ、楽しい企画にすることを強く意識しています」。

参加した社員から「他には何かないの？」と聞かれることもあるそう。「尋ねた社員は地域福祉に関わっているという意識はありません。でも実は地域福祉につながっている。こういう流れが出来たことはとてもいいことだと思います」と話す廣木さん。この流れを他の企業に、そして地域で暮らす私たち一人一人に繋げていくことが、AUが目指す場所になるんだな、と感じた取材でした。

その他久留米ガスとAUの取り組み

2024 11月 マラソン大会の実施

家で過ごしていた期間が長く、就労相談をしていた男性2人が福岡マラソンに挑戦。その活動を応援するために、マラソン経験がある社員と共に小さなマラソン大会を実施。給水所を2カ所作りゴールテープを準備するなど、本番さながらの演出をしました。



2024 12月 キャッチボール会の実施

道具も経験もないが野球をやってみたいと言う男の子3人に対し、野球経験がある社員と共に市内の広場でキャッチボール会を実施。AUメンバーも含めて18人が集合。小学生から50代までの幅広い年代の人々が子どものように大声で笑い、ボールを追いかけていました。



事業を担う「個」の集合体 久留米 AU-formal 実行委員会

市民活動団体が活動する個人が集まり結成。今年度から参加支援事業を担います。

特別号
叶え合う支援
詳細掲載！

グッチョ
Vol.36特別号



AU-formal
Project
Instagram



久留米ガス株式会社
左：権藤 丞さん 中央：吉田 充智代さん 右：廣木 孝行さん



＼地域福祉マガジン／



久留米市
健康福祉部地域福祉課
〒830-8520
久留米市城南町15-3
☎0942-30-9175
Fax0942-30-9752

＼グッチョはWEBで配信中／

グッチョは市ホームページで読めます
1～2か月に1回、最新号を配信中

